長田下地域　振興会だより　第２８号

２０１７年(平成２９年)３月２３日発行

自主防災訓練　12月4日(日)

昨年12月4日(日)、中長田集会所を拠点にして、長田下地域の自主防災訓練を行いました。

当日は、雨上りの曇天の中、90名余の住民が、各地域の班ごとにグループでの避難訓練を行いました。皆さん定例時間内に拠点地に集結。市役所危機管理課の神田係長から研修を受け、非常用炊き出しの五目ご飯と振興会役員さんの味噌汁の炊き出しを頂き、いっそう防災意識を高めました。ひとは福祉会の送迎、振興会役員のお世話に感謝して昼には無事終了しました。

なお、今後は、この全体訓練を受けて、各地区・各班ごとに小ブロックでの具体的な防災対応が課題となると思います。

（担当T．K）

防災研修

炊き出し訓練（五目ご飯）

市危機管理課の神田係長

第3回ふれあいの集い　～グランドゴルフ大会～　12月11日(日)

中長田集会所で、約30名の参加で行われました。私も今回初めて参加しました。やってみて、どうしてグランドゴルフがこんなに人気があるのかがわかりました。

準備が簡単で、ルールも簡単。また、30人いても30人が同時にプレーができほとんど待つことがありません。30人が4～5人のグループに分かれ、1番から8番までのコースを2回まわり、1位・2位・3位が決まりました。ホールインワン賞は12本も出ました。

誰でもすぐできるといっても、ずっとやられている方は、競技力も高く、上手です。だからこそ、おもしろいんだと思います。

時間に制限がないので、焦らずゆっくりと、みんなで和気あいあいとできました。楽しかったです。

（担当Y．H）

誰でも楽しめるグランドゴルフ

第4回ふれあいの集い　～出前講座～　2月28日(火)

地域包括ケア推進のための出前講座として、安芸高田市高齢者福祉課職員　渡海さん、同市地域包括支援センター職員の永井さん、横見さんにお越し頂き、「少子高齢化を迎え今後も住み慣れた自宅や地域で暮らし続けるためには」と題して講演して頂きました。

いつもご協力頂いている血圧測定の後、「地域包括ケアシステムとは？」「なぜ、このシステムが必要なのか？」などの説明をして頂きました。

なかでも安芸高田市では、高齢化45．1％の向原町が47％の高宮町に次いで二番目に65歳以上の高齢者人口率との説明には驚きました。

続いては、認知機能が高まるという軽い体操を実演して頂き、約20名の参加者皆さんは、日頃の運動不足を感じながらも、和気あいあいのなか真剣に身体を動かしておられました。　（担当K．M）

右から渡海さん、永井さん、横見さん

住み慣れた自宅や地域で暮らすために

人間ホール　　１１月２６日（土）

冬の朝を思わせる１１月２６日、向原生涯学習センターみらいで、ひとは福祉会の人間ホールがありました。

２８回目を迎えた今回はカープ優勝記念として、紙芝居『カープ初優勝物語』、カープ女子コンテスト、ものまね大会などが企画されました。また屋内では、雑貨やレザー・トールペイントなどの商品が並び、安芸高田ものづくりの会の体験コーナーがありました。

今年は向原中学校１年生がボランティアスタッフとして活躍されていました。振興会の焼きそばブースでは偶然にもお祖父ちゃんが鉄板に向かい、お孫さんが接客をされる光景が微笑ましかったです。年齢問わず、たくさんの人が動き、笑顔輝く、出逢いの場となりました。

（Ｔ．Ｋ）

たくさんの人の笑顔輝く、出逢いの場「人間ホール」

「長田下地域の文化財保護と伝承」について考える⑲

今回は、『長田の名称』について調べてみることにしました。

この長田地域は、わたしたちの先祖が、田畑を耕したり、山林を伐採したりしながら苦労して生活し、我々に尊い命をつないでくれた土地なのです。その土地の由来といったものを考えてみるのも大切なことかと思います。

「長田」について、向原町史を初め、いくつかの資料を調べていくと、「長田村」という地名は、平安時代末期には、「厳島神社領地」などと古文書に出ているそうです。したがって、かなり古くから「長田」の呼び名はあったことになります。

広島市方面を望む

「芸藩通志」（広島藩の地誌１８２５年完成の文書）には、「長田村」について、**『広さは３０町余（約３０ｈａ）、幅３町（約３３０ｍ）、南北に山連なり、東西は長く、田疇（でんちゅう）なり。村名も地形によりて、よぶなるべし。一つの川、坂村より来り、村中を通じ、西の方　井原村に入る』**と書いてあります。「田疇（でんちゅう）」とは、田地、耕地のことです。

この文書から、長田村という地名は、「地形によって、そう呼んだのであろう」と言っています。この長田村は、東西に流れる長田川（明治以降、三篠川という）が、長年の間に、上流から肥えた土砂を運び、両側に河岸段丘をつくり、現在の長田地域が出来上がったものと考えられます。もちろん、河川の氾濫があって、昔の人々の耕地つくりは、大変な苦労であっただろうと想像します。

長田の古墳から分かるように、古くは、この地域をまとめる力を持った支配者がいたことでしょう。そして、平安以降では、厳島神社の領地であったりして、この地を統治する地頭がいたり、時代が過ぎて、内藤氏の支配する時代へと移っていったのです。そして、浅野氏などの統治する江戸時代へ。

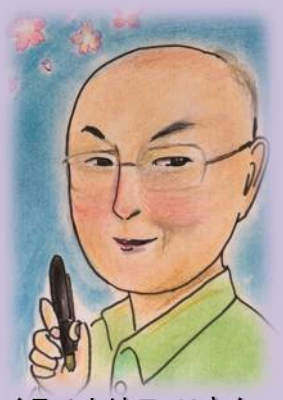
江戸時代になると、長田川の川舟が高大地湊（農村交流館「やすらぎ」前の淵）を基点に、三田経由で深川まで、そして、荷を積み替えて、太田川経由で広島藩蔵屋敷へと、米や鉄などを運ぶようになりました。わたしたちの先祖は、川舟を横目に見ながら、稲作などに汗を流し、必死に生活して、子孫を増やしていったことでしょう。

徳丸や明神谷の市道から、長田下地域の地形を眺めながら、昔を偲びました。

（Ｆ．Ｔ）

長田下地域人物伝⑬

～長田下地域自治振興会二代目会長の笹岡さん～



イラストはＴ．Ｋさん

２００９年（平成２１年）４月から２０１６年（平成２８年）４月まで振興会会長を務めて頂きました笹岡邦彦さん（４区）の別の姿を紹介します。

１９４２年（昭和１７年）１０月広島市舟入川口町で、誕生されました。戦争が激しくなった１９４５年（昭和２０年）３月、お母さん、お兄さん、お姉さんと一緒に、長田のお母さんの実家に疎開されたそうです。（２歳の時）

そして、８月６日原爆投下時、爆心地近くに勤務しておられたお父さんは亡くなられ、市内で開院されていたお祖父さんも８月下旬に亡くなられたそうです。

待っても帰らぬご主人を捜しに、お母さんは、数日後広島に出向き焼野原をさまよわれましたが、帰ってきたのはご主人の勤務先の会社で受け取られた「山分けの遺骨」だけだったそうです。

三人の幼い子供とともに取り残されたお母さんは、小学校教師に転身され原爆後の苦難の人生を歩まれたそうです。その後お母さんは、広島で見た惨状、絶望、怒りなど「噴き出る思い」を一切封印して明るく仕事に没頭されたそうです。

お母さんが原爆のことを語られなかったから、笹岡さんは独学で学ばれたそうです。

笹岡さんが中学一年生のとき、お兄さんに連れられて、その年開館の原爆資料館を初見学されたそうです。「怖かった。気持ち悪かった。」同時に、「いくら戦争でもここまでしなくても。許せん。」と怒りが込み上げてきたそうです。

成人して高校教師になられた笹岡さんは、語れぬ語り部の二世として、原爆が残された者の生き方をどう変えたのかという点を軸に、教え子の感性を揺さぶる授業の創造に努力を続けられたそうです。

英語教師の研修で渡米した際は、アメリカ人にヒロシマへの思い、核意識について聴き取り調査をしたり、ヒロシマ紹介の授業をされたそうです。

向原小学校６年生の平和学習

学校では、学校新聞、学校だよりに原爆・平和についての手記を掲載されたり、校長講話と学校長式辞には、必ず原爆、平和、ヒロシマの高校生としてどうあるべきか等を盛り込んでおられたそうです。

８月６日の平和祈念式典には極力参加されているそうです。

退職後は、小学校や高校の平和学習へ講師として招待されたり、ラジオ・テレビ・新聞を通じてヒロシマ・平和の発信をされています。

（K.M）

発行：　長田下地域自治振興会　　担当：　広報委員会、企画調整部